番外編 それから壱　Dの情熱

登場人物
寺多さん（61歳）　寺多妻（トモ子さん）（58歳）　杉木さん（32歳）

　寺多さんは、散歩して誰とも挨拶することのなかった日など、自分も元気がなくなってきたけど、自分の町もなぁと思う。
　昔は町内を歩くだけでも、いつ帰れるのかと思うほど大勢に声をかけられ、こちらからも声をかけ、町内の祭りは子どもたちであふれ、町内の運動会は予選の大会までやるほどだった。自分自身も仕事にかまけ町内の付き合いも減ったし、子どもが独立してからは町の行事に参加することも少なくなった。

　そんなとき、新聞で見た、いかにも元気そうな青年のことを思い出した。
　その青年はまちづくりコーディネーター皆出歩といい、町の中心市街地の商店街で「まちづくり工房」を主宰していた。

寺多：突然すみません。先生。元気がないんですがどうしたらいいでしょう。いえいえ私ではなくて、私の住んでいる紋白町のことなんです。

　寺多さんはひととおり紋白町の昔話や今の様子を話し終えると病院で医師の診察を受けているような様子で、なんとか町を元気にしたいと言った。
　元気なときの寺多さんを知らないこともあるが、もともと人柄のいい皆出さんは、寺多さんを本当に気の毒に思ったのか、そのように真剣に町のことを憂えている寺多さんは、素晴らしいし、人も町も少しのことで元気がでるといって、まちを元気にするための**DROP**の法則という話を始めた。

皆出：DROPというのは、まちを元気にするためのキーワードの頭文字を集めているのですが、元々はアメリカのダウンタウンを活性化するのに・・・

寺：先生、アメリカの話はいいんで紋白町のことを。

皆：（笑）わかりました。まず、Dですが、ディスカッションあるいはデザイン、そしてドゥーという意味です。私がはじめてこちらの商店街を元気にしましょうといってこの工房を立ち上げたときは、誰も相手にしてくれませんでした。それで、勝手に町の地図を作って勝手にPRを始めたころから、少しずつ僕の話を聞いてくれる人が増えて、その人たちと毎晩毎晩話し合いを重ねました。

寺：何の話です？

皆：町の未来の話です。つまり、これからの町や商店街のデザインをしようと呼びかけたんです。

寺：それや！先生ありがとう。

まだ続きがあるという皆出さんをふりきるようにして、寺多さんは事務所を飛び出した。

ようやく寺多さんの人柄がわかりかけてきた皆出さんの笑顔とためいきに見送られながら、寺多さんは竜馬のようにかけていった。

杉木：お義父さん、なんか元気ないですよね。

寺多の妻トモ子：そうなのよ。一週間前に紋白町を元気にするとかいって、いろんな人に町の将来を話し合おうと声をかけに言ったらしいんだけど、誰も相手にしてくれなかったといって落ち込んでいるのよ。DだDだと一人ではしゃいで、駄目だ駄目だと一人でめげているのよね。

杉：お義父さん、いいことしようとしてたんですね。お義母さんから聞きましたけど、皆出さんはDOとも言ったんでしょ。まず、一人からでもはじめてみたらどうですか。

寺：そうか、一人でもなぁ。よし、わし一人で夜回りからはじめるわ。ええこというてくれたな、杉木くん。で、君はどうや？

立ち直りも早い寺多さんであった。

Design

D

NEXT STORY is R